

2 振文鏡について

奈良崎鏡の概要

奈良崎遺跡出土の振文鏡（第109図）は、復元直径9.0cmで外区の大半を欠くものである。鏡面側にはいくつもの銹膨れが生じており、残存部分も縁などの傷みが著しい。現状で面積にして全体の半分近くが失われている。しかし、欠損は銹の進行などによるものであり、本来は完形品で副葬されていたものと考えられる。なお、わずかに赤色顔料の付着が認められる。

全体に反りを持ち、鏡背の中央に鈕をおく。鈕座は二重の突線。いわゆる 仿製の振文鏡であり、主文には珠点の周囲を弧線で囲んだ鱗状文を用いる。鈕を巡って蒲鉾状にわずかな盛り上がりを巡らす。その上を2本の弧線で4区分し、間を時計回りの方向に巡る鱗状文で埋める。ただし、この弧線は珠点三つに1本の弧線を添えたものであり、また弧の度合いも弱い。一つ一つの珠点を弧線ではっきり囲む通常の鱗状文と比べて、その省略形態と見ることができる。また、主文部の区画に乳を用いない点も本鏡の特徴である。内区外周は3重の突線で囲み、その外側に櫛歯文を巡らす。一段高い外区は素文である。外区及び突線や珠文上には研磨の痕をとどめるが、地の部分には及んでいない。鋳上がりは良好で、恐らく錫分の高い青銅を用いているものと見る。

小 考 察

振文鏡の分類 奈良崎鏡はいわゆる「振文鏡」に属する。「振文鏡」は「縦形文鏡」などを経て後藤守一によって付けられたものであるが、各種の 仿製鏡の中でも良く親しまれた名称として今なお通用している。またこれを対象とし、特に分類を中心とした研究の成果もいくつか発表されており、資料の集成も進んでいる[小林1983・小沢1988・水野1997]。

振文鏡は一つのまとまりを持った鏡群で、この鏡群のまとまりを特色づける指標は二つ挙げ得る。一つは田中琢によって指摘された重要な特質であるが[田中1979]、振文鏡はいわゆる 龍鏡（単頭双胴神鏡系）の一部の図文を利用して主文としていることである。神像の胴部、あるいは内区の外周寄りを巡る獣毛表現などを切り取ったもので、両者の関係については水野敏典が適確に表現している[水野1997]。そうした主文の起源に関係することであるが、図文が鈕を巡って一方向に旋回するように表現されている。もう一つの特徴は、直径が13cm～



第109図 奈良崎遺跡出土の振文鏡

6 cm間に収まることであり、仿製鏡の中では小型鏡ばかりとなる。

振文鏡は、主文の特徴の違いから細分されてきた。樋口隆康は5型に区分し〔樋口1979〕、この分類は若干のズレはあるものの、後の分類案にも引き継がれている。樋口案ではⅠからⅤへと主文の型式変化が想定されていたようである。しかし、田中琢の指摘によってそれぞれの主文の違いが鼉龍鏡の模倣部分の違いであることが説明されており、それぞれ異なる系列として扱うほうが良い〔森下1991〕。その差は主文だけの違いに止まらず、外区文様の違いとも結び付くからである。

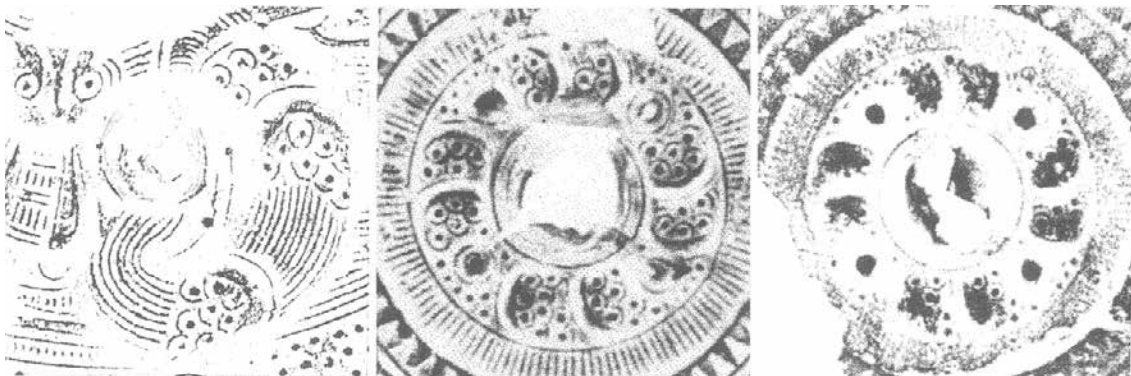
鱗状文の系譜 奈良崎鏡も大枠としてこの振文鏡に属する。その鱗状文は鼉龍鏡の神像胴部に見られるもので、本来は中国製の盤龍鏡から仿製鏡に取り入れられたものである。ただし、奈良崎鏡のように鱗状文を用いる振文鏡は数少なく、静岡県陣座ヶ谷古墳出土鏡（径8.3 cm）〔高橋編1930〕、東京国立博物館蔵鏡（8.5 cm）〔田中琢1979〕、香川県円養寺C地区出土鏡（8.0 cm）〔瀬戸内歴史民俗資料館1983〕を挙げ得る程度である。陣座ヶ谷鏡と東博鏡は内区を乳で4つに区分し、各区に二つの房状のふくらみをおき、それぞれ鱗状文を施す。

これらの鱗状文を鼉龍鏡の神像胴部表現と比較したとき、陣座ヶ谷鏡と東博鏡の表現がそこから採られたものであることは明らかである（第110図）。その鱗表現は珠文の周囲をはっきりした弧線で囲み、かつ間を埋めるようにそれらを重ねてゆき、正に鱗のような表現をとっている。一方、奈良崎鏡は同様に弧線の間に珠点を配するが、珠点が縦横に並び、また弧線が連なって一本の曲線で囲んだように表現されている。明確な鱗状表現からの省略形と見ることができる。

円養寺鏡では鱗状文を用いるのは一部であり、他は倭状の平行線で埋めている（第111図）。しかしそれ以外の特徴、乳を持たないこと、鈕座や櫛歯文帯、外区が素文であることなど奈良崎鏡との共通点は多い。この円養寺鏡は森下分類の倭文鏡系と関連付けることができる。奈良崎鏡の内区にみられる蒲鉾状のふくらみも倭文鏡系と共通するものと見るができる。なお、水野敏典は倭文鏡系にみられる珠文を鱗状文の省略形式と見る。

年 代 かつて振文鏡を獣文表現からの変形品とみて年代を下らせ、中期の製品と位置付けられた時期もあった。しかし、上記のような他の仿製鏡との比較研究が進み、また年代のわかる古墳の出土例も増えた結果、鼉龍鏡と並ぶ前期の製品と見るのが通説となった。

奈良崎鏡には例の少ない特徴もあるが、振文鏡の一種の倭文鏡系と関連付けるのが妥当であれば、その製作年代は古墳時代前期後半におくことができる。さらに細かい位置付けは難しいが、その鱗状文が鼉龍鏡のそれから省略が進んだものであり、また外区の素文も鋸歯文等の省略形と見ることもでき、振文鏡



1 鼉龍鏡（出土地不明）

2 振文鏡（出土地不明）東京国立博物館蔵

3 振文鏡（静岡県陣座ヶ谷古墳出土）

第110図 鱗状文

の中でも新しい部類に属する可能性がある。

振文鏡の副葬古墳 振文鏡の出土古墳には円墳が多く、また前方後円墳の例も主槨以外の埋葬施設に副葬されている例の多いことが注目されてきた〔伊藤 1967〕。また 亀龍鏡との関連が明らかとなり、大型鏡の多い 亀龍鏡と小型鏡中心の振文鏡とが、図文の一部を共有しながら作り分けられていたと考えられるようになった。

車崎正彦は、鏡の大小がそれを分け与えられる地方首長に対する「畿内政権の信任の程度の象徴」〔車崎 1993〕に関係するものとみなした。振文鏡は上述のように大型鏡の図文の一部を借用し、その小型品として生み出されたものであり、大小は意図的に作り分けられたものと考えられる。振文鏡成立の背景について積極的な評価を行った説である。



第 111 図 香川県円養寺 C 地区出土鏡

今回の奈良崎鏡の出土は、この説を補強する好材料と成り得る。すなわち巻町の菖蒲塚古墳からは直径 23.6cm の大型の 亀龍鏡が出土している。新潟県では古墳出土鏡数は 10 面をわずかに超える程度であり、かつほとんどが小型鏡に限られる。そうした状況においてこの菖蒲塚の例はきわだっており、これまでも注目する研究者が多かった。橋本博文は山梨県甲斐銚子塚古墳や同岡銚子塚古墳例と同様の性格を想定し、「同一の契機に配布された」可能性を説く〔橋本 1999〕。また、同様に分布の中核地から遠く離れた出土例として、山口県柳井茶臼山古墳とも比較されている〔車崎 1993〕。

菖蒲塚古墳は全長 53m の前方後円墳である。奈良崎遺跡については後世の改変によって本来の墳丘規模は不明であるが、それほど大きな墳丘は想定できない。今回の奈良崎鏡の出土により、大型 亀龍鏡－前方後円墳、小型振文鏡－小古墳という組み合わせが一定の地域内で成り立つことになる。古墳時代仿製鏡の生産や流通が政治的な背景とどのように結び付くのか、さらに検討を要する課題ではあるが、こうした側面を検討する材料としても奈良崎鏡には意義がある。

引用・参考文献

- 新井 悟 1995 「亀龍鏡の編年と原鏡の同定」『駿台史学』第 95 号
 伊藤禎樹 1967 「振文鏡小論」『考古学研究』14 巻 2 号 考古学研究会
 小沢 洋 1988 「振文鏡について」『小浜遺跡群 俵ヶ谷古墳群』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 37 集 木更津市小浜地区土地地区画整理組合・（財）君津郡市文化財センター
 車崎正彦 1990 「江川山の鏡－古墳出土鏡をめぐる－」『上尾市史調査概報』創刊号 上尾市教育委員会
 車崎正彦 1993 「亀龍鏡考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
 小林三郎 1988 「振文鏡とその性格」『日本古代史論苑』遠藤元男先生頌寿記念論文集

※小林三郎は「振文鏡」の中でも、特にこの鱗状文を持つものを他と区別してとりあげている。

- 瀬戸内歴史民俗資料館 1983 『讃岐青銅器図録』
 高橋 勇編 1930 『静岡県史』第 1 巻
 田中 琢 1979 『古鏡』日本の原始美術 8 講談社
 田中 琢 1981 『古鏡』日本の美術第 178 号 至文堂

- 鶴巻康志 1993 「越後における前期古墳の概要」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
日本考古学協会1993年度新潟大会資料
- 名本二六雄 1982 「振文帯を持つ鏡—相の谷古墳出土鏡の占める位置」『遺跡』第22号
- 名本二六雄 1983 「続振文帯を持つ鏡—相の谷古墳出土鏡の占める位置」『遺跡』第24号
- 橋本博文 1999 「副葬品」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 樋口隆康 1979 『古鏡・古鏡図録』新潮社
- 水野敏典 1997 「振文鏡の編年と製作動向」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集 津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会
- 森下章司 1991 「古墳時代?製鏡の変遷とその特質」『史林』74巻6号 史学研究会